

オマケの掌編・短編小説

(蛾)

「蝶(ちょう)」と「蛾(が)」
字面と発音からして「蛾」は何となく怖い感じですよ。

蝶々は飛んでいるのをよく見かけますが、蛾が飛んでいるのを見た事は一度もありません。なので、蛾が飛んでいる処を見かけたら結構「ドツキン」とするかもしれません。

「見たなあ、俺が飛んでいるのを。消えてもらうしかないな」

そんなことを耳元で囁かれそうな気がするからです。

そうして何より「怖さ」が感じられるのは、歌舞伎の青隈を描いたような、メリハリの在り過ぎるどぎつい羽根の文様です。

蝶々は羽を立てて休みますが、蛾は羽を広げて休むので、あたかも「この毒々しい文様をとくと見ろ」とでも言っているかのようです。

その奸計の通りに引つかかって、自分は蛾を見るたびに、一瞬「ぞっ」として鳥肌が「もぞもぞ」と泡立ちます。

しかしその蛾ですが、蝶々は花から花へひらひらと舞って、その蜜を吸っているようなのですが、よく見かける蛾は、例えば玄関脇のモルタル塀に羽を広げてへばりついているばかりで、ピクリともしませんし、そんなものに一晩中へばりついていても、モルタル塀からは蜜も水分も口にすることが出来そうもないのに、なんで一晩中へばりついているのか、という不思議な側面も持ち合わせております。

「おまえなあ、いったい何を考えとうねん？あん？何が楽しいんや？何しにこの世に生まれてきたんや？言いたいこと、あんねえやったら、はよ、言うてみい」

それにしても、相手方の無言、無表情、無反応は本当に困ります。なので「当たり」を求めてついつい色んなことを矢継ぎ早に訊きたくなってしまいます。

それにしても何故、そんな蛾の事が、気が付くとしばしば頭の片隅に浮かび上がってくるのか、自分でもよく分かりませんが、妙に気にかかって仕方がない事だけは確かです。

蝶々の事は思い出しもしないのに、不思議です。何かが自分のアンテナに引っ掛かっているのでしょうか。

兎に角、何度も出てくるので、気になって仕方がありません。出てくるたびに文様が怖いので、憂鬱にもなります。

何かのシグナルであるならば、時を待たずに「暗号解読」に漕ぎ着けて、奥歯に残滓が挟まったままの様な鬱陶しさをできるだけ早く、取り除きたい思いに駆られております。

そんな折、不図

「天はこちらが望むような形で解をお示しにならぬ場合がある。敢えて形を変えて解をお示しになり、それに気づくかどうかお試しになる場合が時折ある」

大昔に読んだ本の一節を思い出し、形を変えた暗号を見落とすのも何だしなど、今少し前向きに観察を続けることに致しました。

正直に申し上げれば「自分はここまで気づく人間なのだぞ」と単に人々に誇りたいだけなのか、それとも真摯な気持ちからこうした取り組みをしようとしているのか、定かではなく、むしろ疑わしい部分もございます。また、先に記された「時折ある」の発生確率がどれほどの頻度で発生するのも知る由も術ありません。

そういった点からすれば、曖昧模糊とした不明瞭さばかりが目立つのですが、従来の手垢にまみれた「人間様の尤もらしい言説」にはいい加減うんざりしてきているので、一般の危機に際し、新しい切り口を見出そうと、ここは敢えて全く手つかずの「辺境の地における八卦占い」のような方法をとってみようかなと思っただ次第でございます。

正に「当たるも八卦、当たらぬも八卦」の五分五分勝負。「勝った、負けた」は時の運。天が勝つか我（が）が勝つか？その勝負すらもお預け申す。

そんな都々逸のような語呂合わせを口の中で口ずさんでいるうちに、だんだんその気になって参りました。

「鶴は千年、亀は万年。人は百年、蛾は一年。長短あれども今生一回。ならば後悔すべからず、あとは儘（まま）よ、と清水の、高舞台より荒波に、捨て石覚悟で飛び込まん」

(完)

(追記)

オマケの小説には必ず写真を載せておりましたが、今回は「蛾」の絵柄が怖いので割愛させていただきます。悪しからず。